

---

# ふくいミュージアム

1991.9.30

No.20

福井県立博物館

---



木造十一面観音立像(部分) 福井市大安寺

---

## 秋の特別展

## 慈悲の造形 — 越前の観音 —

10月25日(金)→12月1日(日)

## 趣旨

わが国の信仰史のなかで、最も広く崇敬を集めてきたものの一つに観音菩薩があります。観音菩薩は朝廷、貴族の営んだ大寺院から村むらの小堂まで、上下を問わず、さまざまな形で崇拝されてきました。越前においても同様に、今なお多くの遺品が残されています。

今回の特別展では、越前における観音信仰の歴史と広がり、平安時代から江戸時代の遺品をとらえて理解していただくとするものです。

## 【展示コーナー】

- |             |            |
|-------------|------------|
| I 浄土信仰の観音   | IV 民間信仰の観音 |
| II 密教の観音    | V その他の観音   |
| III さまざまな観音 |            |

## 【主な展示資料】

## 〈絵画〉

- |                   |         |        |
|-------------------|---------|--------|
| ・ 当麻曼荼羅図          | (重文)    | 敦賀市西福寺 |
| ・ 主夜神藏            | (同上)    | 同上     |
| ・ 阿弥陀二十五菩薩来迎図(同上) |         | 福井市安養寺 |
| ・ 阿弥陀三尊来迎図(武生市指定) |         | 武生市正覚寺 |
| ・ 山越阿弥陀図          | (同上)    | 武生市玉宝寺 |
| ・ 胎藏界曼荼羅          |         | 三国町滝谷寺 |
| ・ 准胝観音座像          |         | 同上     |
| ・ 十三仏図            | (今立町指定) | 今立町成願寺 |

## 〈彫刻〉

- |                   |           |
|-------------------|-----------|
| ・ 木造 聖観音立像(県指定)   | 鯖江市加多志波神社 |
| ・ 木造 聖観音立像(三国町指定) | 三国町西光寺    |
| ・ 木造 聖観音座像(武生市指定) | 武生市味真野神社  |
| ・ 木造 十一面観音座像(同上)  | 武生市慈心寺    |
| ・ 木造 千手観音立像(同上)   | 武生市安泰寺    |
| ・ 木造 十一面観音立像      | 朝日町日吉神社   |

- |  |            |
|--|------------|
| ・ 木造 如意輪観音座像(勝山市指定)  | 勝山市光明院     |
| ・ 木造 馬頭観音座像  | 武生市善源院     |
| 〈経典〉   |            |
| ・ 紺紙金泥 法華経卷八(県指定)  | 大野市妙典寺     |
| ・ 仏説無量寿経卷下(同上)   | 丸岡町称念寺     |
| 〈工芸品〉  |            |
| ・ 鏡像 聖観音座像(県指定)  | 今庄町小倉谷白山神社 |
| ・ 板絵 女神像   | 今庄町八乙女白山神社 |
| ・ 押出仏 阿弥陀三尊像(武生市指定)  | 武生市正覚寺     |
| 〈絵馬・石仏・芸能関係資料〉   |            |
| ・ 万歳図  | 三国町滝谷寺     |
| ・ 石仏 十一面観音立像(福井市指定)  | 福井市盛源寺     |
| ・ 来迎会面   | 福井市糸崎寺     |
| 以上のように、絵画・彫刻・経典・工芸品・絵馬・石仏・芸能関係資料など、さまざまな資料で展示を構成します。これらの造形は、観音信仰によせる先人の願いが生み出したものでしょう。そして、そこに込められた願いに思いを馳せ、慈悲の造形にひたって、信仰を支えてきた人びとの心を偲んでいただけだと思います。 |            |

## 特別公開！重要文化財「絹本着色 八相涅槃図」

本特別展の期間中の11月6日から12月1日まで織田町劔神社が所蔵する重要文化財「絹本着色 八相涅槃図」を常設展示室で公開します。

この涅槃図は、これまで奈良国立博物館に寄託されていましたが、今回の同神社への里帰りを機会に、当館において特別に展示するものです。特別展と合わせてご覧いただければ、幸いです。

展示資料から



木造聖観音立像 鯖江市加多志波神社



絹本着色 主夜神像 敦賀市西福寺



絹本着色 阿弥陀八大菩薩像 敦賀市善妙寺

冬の企画

館蔵資料展

2月7日(金) → 3月15日(日)



注口土器 縄文時代晩期

博物館では開館以来、本県の自然や歴史、民俗などに関する資料の収集につとめてきました。これらの資料は常設展示や特別展に展示してきましたが、まだ多くの資料が未公開のままです。そこで、今回の館蔵資料展も、今まで収集してきた資料の中で未公開の資料を中心に、いくつかのテーマをたてて、展示を構成します。

博物館の資料収集にご協力くださいました方々への感謝の気持ちを表わすとともに、今後の博物館活動に対する県民のみなさまのご理解とご協力を得ようとするものです。

研究ノート

ききやく  
**鯨脚類の進化と福井県産化石について**

水に戻った哺乳類のアシカ、セイウチ、アザラシなどの鯨脚類の起源と進化の様子については、1960年代ごろから主にアメリカの研究者を中心に研究され、その概要が次第に明らかにされてきた。その結果、鯨脚類の進化と拡散の過程は、移動しにくい陸上の動物とは違い、古海流や古地理の影響を強く受けながらも短期間に全地球的な規模にまたがるダイナミックなものとして説明されている。周りを海に囲まれた日本からも鯨脚類の化石が多数報告されており、進化と拡散を解明するうえで重要な地域となっている。福井県からも高浜町鎌倉、福井市高須町の2ヶ所から鯨脚類化石が産出している。この研究ノートでは福井県産鯨脚類と関係が深いアシカ上科の進化、拡散の概要と福井県産標本について述べてみたい。

**鯨脚類の起源**

鯨脚類の分類については、研究者の間でも食肉目に属し鯨脚亜目とする考えや、鯨脚目として独立させる考えなどがあり、さらにすべての鯨脚類が単系統だとする考えと、アシカ・セイウチ類とアザラシ類は別の系統だとする考えがあり必ずしも分類が確定した状態とはいえない。ここでは、現在正式な分類単位を必要とする場合に一般的に使われている鯨脚亜目を用いて説明する。

現在鯨脚亜目の起源と考えられる最古の化石は、北米カリフォルニア州の中新世初期(約2400万年前)の地層から報告されたエナリアークトスである。この動物は中型の鯨脚類で、水中生活への適応を示す鼻腔の拡大(一度に大量の空気を吸い込み水中で長時間活動できる)、嗅球の縮小(水中では不必要のため)がみられるが、反面食肉類の特徴である肉を引き裂くための裂肉歯を残し、耳骨胞や脳などに陸上のクマ科の絶滅系統であるアンフィキオン亜科の特徴をよく残している。このようにエナリアークトスは陸上で進化、発展した哺乳類のクマの先祖に近い仲間の一部が再び水中生活者へと適応していったことを示す最も原始的な化石動物である。現生の動物で

例えばラッコに近い形態をしているが、より水中生活者として適応した生物だったと考えられている。

**鯨脚類, 特にアシカ上科の進化について**

エナリアークトスを先祖とするアシカ上科の進化の速度は中新世前期の中ごろになると加速し、アシカ科、セイウチ科、デスマトフォカ科(絶滅科)の3つのグループに分かれていく(図1)。

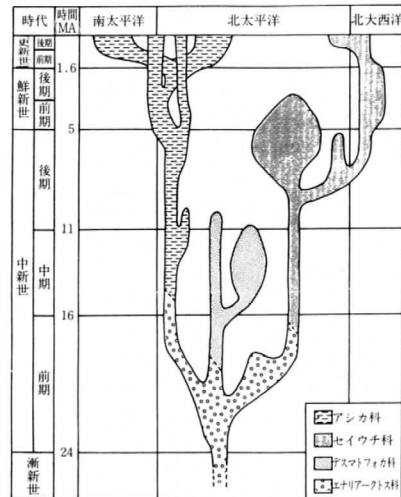


図1 アシカ上科の系統図 (Reppning and Tedford, 1977を簡略化) (富田, 1990)

さらに、中新世中期ではネオテリウム属、アローデス属、デスマトフォカ属、オタリア属など4属8種に、中新世中期末でデスマトフォカ属は絶滅してしまうが、中新世後期ではセイウチ属、ドゥシグナーサス属、オタリア属など3属11種に分化している。これは、中新世前期までの時代に鯨脚類とおなじような生態的地位を占める動物がいなかったために急激に分化が起こったためと考えられる。このようにして鯨脚類のなかまは、主に北太平洋で発生し分化していったが中新世後期に北大西洋へ進出し、さらには赤道をこえ南太平洋にも分布を広げ、全世界の海洋へ水中生活者としてのニッチェを占めていたのである。

**アシカ・セイウチ類の拡散について**

アシカ・セイウチ類の拡散については、アメリカの研究者、リベニングによって図2のようにまとめられている。

1. 最古のアシカ上科の化石(エナリアークトス) 2400万年前
  - 1a. アシカ上科のなかま北太平洋両岸に生息。

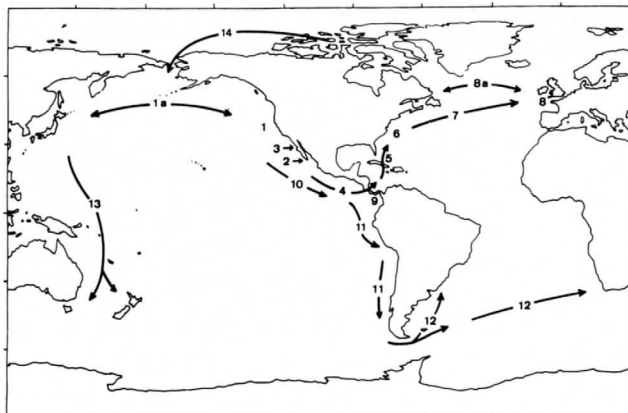


図2 アシカ・セイウチ類の拡散概念図(Repennig et al. (1979)を改作) (富田, 1990)

1500万年前(福井県産の鱈脚類化石)

2. 約800万年前のセイウチ科化石の南限
3. 約800万年前のアシカ科化石南限
4. 800万年前ごろ?セイウチ類パナマ地峡を越えてカリブ海に進出(当時海でつながっていた)
5. 500万年前ごろセイウチ類古メキシコ湾流にのって北上する。
6. 大西洋最古のセイウチ科化石(500万年前)
7. セイウチ科北大西洋に拡散する(400万年前)
8. ヨーロッパ最古のセイウチ科化石(400万年前)
- 8a. セイウチ科北大西洋の両岸に生息(現在まで)
9. 300万年前ごろパナマ地峡の消滅し、以後通過できなくなる。
- 10,11. 300万年前ごろ気温の低下とともに南下。
12. 400万年前?ごろ南アメリカ最南端ホーン岬をこえて大西洋に進出。
13. 300万年前ごろオーストラリア・ニュージーランド地域へ進出。
14. セイウチ属北極海経由で北太平洋に再び進出(60万年前)。

このようにアシカ・セイウチ類は北太平洋で発生し、海流に乗って沿岸沿いに南下し分布を拡大していった。さらにその当時開いていたパナマ地峡を通過し、大西洋にまで分布を広げていった。

セイウチのなかまは、発生した太平洋では鮮新世の中ごろに絶滅してしまうが、北極海経由で再び太平洋に進出してくるダイナミックな動きをみせている。さらに鱈脚類のなかまは低緯度から中緯度、高緯度に行くにつれて体が大きくなっており、同じ生

物は体温調節のための体積と表面積の関係で北へ行くほど大きな体になるというベルグマンの法則に従っている。また繁殖期にはハーレムをつくる特異な生活形態をとっている。

**福井県産鱈脚類化石について**

福井県内から鱈脚類化石は高浜町鎌倉、福井市高須町の2ヶ所で採集されている。

鎌倉標本は頭骨、下顎骨の一部、肋骨、肩甲骨、指骨、脊椎骨など14点が産出している。

1984年に *Prototaria primigena* の学名で新属新種の鱈脚類化石として報告したが、現在はアメリカのバーンズにより、ネオテリウム属のシノニムとされ *Neoterium primigenum* とされている(図3)。

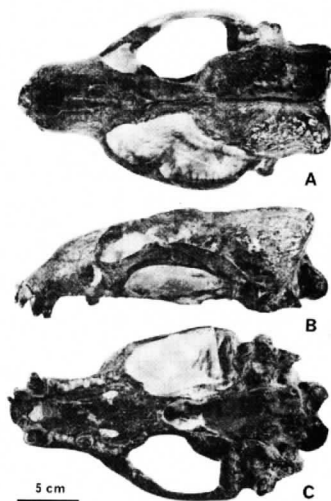


図3 *Neoterium primigenum* A:背側面, B:外側面, C:腹側面

高須標本は下顎骨、肋骨が多数産出している。これらは中新世中期(1500万年前)の化石で、鱈脚類が北太平洋で分化を始めた頃の化石動物で、両標本とも現生鱈脚類と違い熱帯性の貝化石とともに産出しており現在研究中の貴重な標本である。

**参考文献**

Takeyama & Ozawa(1984) A New Miocene Otarioid Seal from Japan. *Proc. Japan Acad.*, 60. 3. 36-39.  
 富田幸光(1990) 鱈脚類の分類と進化。海のは乳類、宮崎ほか(編)、189-205。

(竹山 憲)

## 資料紹介

## イグアノドン科の上顎骨

現在、福井県立博物館では平成元年から恐竜化石の発掘調査を実施している。この調査は、福井県の中期事業実施計画として進められているもので、当面平成5年度まで調査は継続される。

昨年、2年目の発掘調査が実施され、多くの恐竜化石が発掘された。その発掘された恐竜化石の中には、イグアノドン科の上顎骨が含まれていた(写真)。この化石は、発掘中に採集された骨の化石を、南部隆幸氏(現在、成和中学教諭)がクリーニング中に明らかになったもので、これまで発掘された多くの恐竜化石の中でも最も重要な標本であると言える。

恐竜の頭骨は、幾つもの骨の寄せ集まりでできており(図1)、上顎骨は一般的に「うお顎」と呼ばれている部分である。前後の長さが約16cm、高さが約4cmの大きさで、ベルギーから報告されているイグアノドン・ベルニサルテンシスの上顎骨の、約2分の1である。さらに上顎骨には、歯が5本残されている極めて学術的に価値の高い標本であると言える。

今年(平成3年)4月、機会があって中国の内モンゴル自治区の呼和浩特市(ホフフト市)にある内蒙古博物館を訪問した。ここの博物館には、内モンゴルから発掘されたイグアノドンの仲間の、バクトロサウルスの骨格が展示されている。アジアのイグアノドンである。勝山から発掘されたイグアノドン科の上顎骨と比較してみると、共通した点も認められるが、相違する点もあり、異なる種類に分類されるものと考えている。



イグアノドン科の上顎骨

さらに平成2年までの発掘で、イグアノドン科の上顎骨以外にも肋骨・肩甲骨?・趾骨・大腿骨・尾椎骨などの部位もいくつか発掘されている(図2)。これらは同一個体の骨とは考えられないが、平成3年度に発掘されたものとあわせると、ようやくイグアノドン科の全身骨格の復元が可能となってきた。このことは、日本の恐竜化石研究の上で画期的なことと言えるであろう。

イグアノドンは、1822年にイギリスで発見され、イグアナの歯に似た歯と言う意味でイグアノドン(Iguanodon)と命名された。「odon」とは、ギリシャ語で歯と言う意味である。さらに1878年には、ベルギーのベルニサルという村の炭鉱から、イグアノドンの全身骨格が発見され、3年かかって約30体分のイグアノドンの骨格が発掘された。これらの化石は、数10頭のイグアノドンの群れが肉食恐竜に追われ崖から落ちて化石になったと考えられている。この豊富な化石からイグアノドンの復元がなされ、またイグアノドンの生活様式も詳しく研究されている。

(東 洋一)

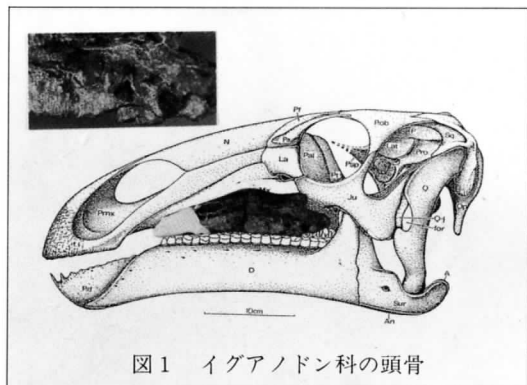


図1 イグアノドン科の頭骨

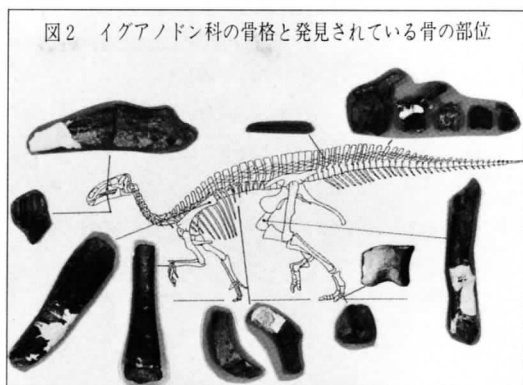


図2 イグアノドン科の骨格と発見されている骨の部位

## 入館者の声

4月24日から6月4日まで、春の特別展『川の生活誌—そのめぐみと恐れ—』を開催しました。本展では、河川絵図、漁具、精霊船など川に関係する資料をとおして、人と川の関わりをさまざまな点から見つめ直すことを目的に開催しました。期間中、入館者のみなさんにアンケートを実施したところ、次のような意見がありましたので紹介します。

- 昔の人が、変わった道具を使って魚をとっていたので、びっくりしました。川舟やフセエバなどが印象に残りました。(中学生・女子)
- 揚水のために人びとが、さまざまな工夫と努力を積み重ねてきたことがわかりました。また、いろいろな資料をみていくと、川と人との関わりが具

体的に理解できました。(60代男性・公務員)

- 九頭竜川近くに住んでいるので、知っている地名や漁具・舟などがあり、興味深かった。(40代主婦)
- 日本の文化の本質は海ではなく、「川」だと思いません。博物館の展示のなかで、県内の川を意識的にとりあげてください。(40代男性・自由業)

そのほか、川へ流す人形や河童の絵、地藏橋やかごの渡の模型などの展示資料については、とくに小中学生から「たいへんおもしろかった」との意見が多くありました。

しかし、「文書には読み下し文をつけるなどの説明文をつけるとよい」、「展示内容が理解できなかった」などのきびしい意見もあり、今後の課題としたいと思います。

## ビデオライブラリーから

### 福井県誕生物語

明治維新をむかえ、明治4年(1871)の「廃藩置県」から、同14年2月7日に現在の福井県が誕生するまで、激動の10年にスポットをあてます。

この間、越前と若狭の地では、新しい地方制度を確立しようとする新政府の方針下に、めまぐるしく県の統廃合がくり返されました。「廃藩置県」の後、(福井)足羽・敦賀の2県時代から、越前・若狭を統一した敦賀県の時代を経て、嶺北・嶺南が石川・滋賀県にそれぞれ分離併合された時代、そして再び嶺北・嶺南を合わせた福井県が設置されるまで、県域の確定は紆余曲折の道のりをたどりました。

また、この過程では、政府の宗教政策に端を発した大野・今立・坂井3郡の一大一揆や、県庁の所在地をめぐる「嶺北」と「嶺南」の新たな地域利害の対立、自由民権運動の高揚のなかで嶺北農村部の地租軽減を訴える運動がくり広げられました。そこには、新しい時代に対応する地域住民の姿が浮かび上がってきます。

福井県誕生の足跡をふりかえりながら 明治前期の地方行政と地域社会の実相を紹介します。

(笠松)

### 若狭の盆

「民族大移動」と呼ばれる帰省ラッシュの中、人びとが都会から故郷へ帰って行くのと同じ頃、水を伝って、あるいは迎え火に導かれてご先祖の霊も帰って来ます。お盆は、先祖の霊を迎えて、一家一族が触れ合い、語り合う時なのです。

若狭地方の家々では、先祖の霊すなわちお精霊しょうらいを祀るための盆棚ぼんたながつくられます。仏壇から位牌を移し種々のお供え物を飾りつけます。僧侶の誦経ずきょうによって先祖の霊を供養してもらうことが多いのですが、村人たちが村の家々をめぐる鉦や太鼓を叩き、踊り、念仏を唱えて供養する六斎念仏も若狭各地にみられます。今日では娯楽的色彩の濃い盆踊りも、もとは盆を迎えた精霊を慰めるものだったのです。

お盆の間精いっぱいのおもてなしをしたあと、お精霊は盆棚のお供え物とともに川に流し、あるいは海に流して送ります。海に面した村では、すべての家のお精霊が乗れるような大きな精霊船をたてて送るところもみられます。また、盛大な送り火を焚いて送るところもあります。

若狭地方一帯には、特色あるお盆の行事が古風を残して今なお豊富に伝えられています。年に一度先祖の霊を迎えて織りなされる、人びとと先祖の霊との交歓のドラマをご覧ください。

(田中)

# 情報をお寄せください。

## 明治期の北海道移住

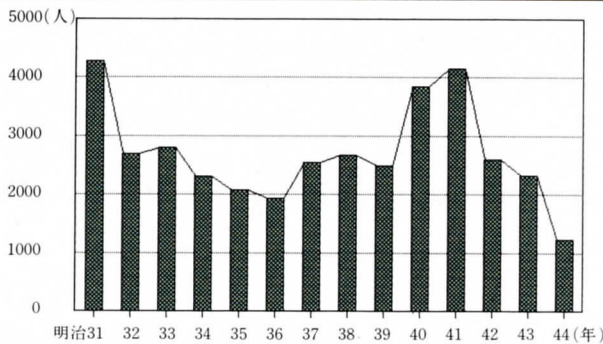
移住に関する **パンフレット・写真・地図・記録文書・その他の情報** をお寄せください。

- 明治期、政府の開拓奨励策により、本県からも多くの人たちが農業や漁業・商業などの新天地を求め、北海道への移住を試みました。とくに、明治20年代後半から農業(団体)移住がさかんになり、単独移住を含めて郷里を立つ人の数は、多い年に4000をこえました。その前途は多難をきわめ、団体移住の成功率さえ2～3割であったといわれています。
- 現在も、北海道内に「越前」や「福井」の地名が、数多く残されています。しかし、移住の足跡はしだいに忘れ去られ、かつての郷里との連絡も絶えようとしています。今一度、北海道移住をふり返り、消え失せようとする地域の歴史を留めておきたいと思います。

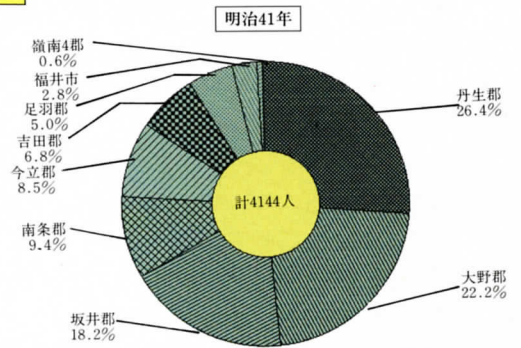


北海道移住手引草(第五) 明治37年2月

### 北海道移住者計(人数)



本県における北海道移住者の推移(明治期)



北海道移住者の郡市別比率(明治41年)

\* 「福井県統計書」より

ふくいミュージアム No.20 1991. 9. 30発行

編集発行 福井県立博物館 福井市大宮2丁目19-15 〒910 ☎ 0776-22-4675(代) 印刷 出口印刷株式会社

